

大通公園を望む窓辺から

札幌農学校とチェンバロ

会長 長瀬 清

今年10月末、第47回全国学校保健・学校医大会が、北海道医師会が担当し札幌で行われました。その時のある会での話です。

札幌農学校は明治9年に、時計台のあるあたりを中心に開設されました。時計台は学校の演武場です。米国からクラーク博士が招かれ、副学長として教育に当たりました。一期生として後の北大初代総長の佐藤昌介、あの「Boys be ambitious」を「青年よ 大志をいだけ」と世に広めた大島正健ら14名の学生がいました。クラーク博士の教えは「Be Gentleman」であり、キリスト教に基づくものでした。二期生には新渡戸稲造、内村鑑三、宮部金吾等がいました。一期生は卒業時日本最初の学士号を授与されました。翌年より東京大学卒業生にも学士号が授与されることになりました。大島正健は札幌農学校に残り、後教授になり、その後同志社普通科、県立奈良中学を経て、招かれて山梨県甲府中学の校長になりました。そこで6度落第を重ねていた石橋湛山と出会いクラーク精神とキリスト教で立派に育て、それにより石橋は後（昭和31年）に総理大臣となりました。落第を重ね大島校長との出会いが運命を変えたといえます。

平成16年9月、大型台風18号が安芸の宮島に大被害を及ぼした後、北海道にも甚大な被害を与えました。札幌の象徴でもある北大農場の二列のポプラ並木の片側一列をすべてなぎ倒しました。その倒木を生かすためにチェンバロを製作することが提案されました。2年後立派なチェンバロ2台が誕生しました。倒れたポプラで作られたチェンバロの演奏を披露したのが、札幌農学校一期生大島正健氏の夜叉孫にあたるチェンバロ奏者水永牧子さんでした。

バロック時代の主たる楽器であったチェンバロの響きは、札幌農学校のクラーク博士とも結びついて、その会で大好評を博しました。

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしずかに飲むべかりけれ

理事 松家 治道

先日、会議の後いつものように数人で居酒屋に飲みに行った。盛り上がってきたところに、滑舌の良い、声も体格も大きな某氏が「人間のオスのナニが他の霊長類と形態が異なる理由が分かった。プランジャーだ!」と突然宣った。酒席の事とて、その後の解説は失念してしまっただが、その翌日に彼より「昨日の話のネタ本です。読むと不快になります。」と、『言ってはいけない』（橘玲著）なる書を頂戴した。その本は進化論、遺伝学と脳化学の最新知見を紹介する、大変重い内容のものであった。

さまざまな「聞いてはいけない」話の中で、自分はその一節“人の本性は一夫一妻?”に興味を引かれたので、ここに少し紹介したいと思う。

曰く、霊長類の中で、テナガザルは一夫一婦制、ゴリラは一夫多妻制、チンパンジーとボノボは乱婚である。ゴリラがそうであるように、一夫多妻制の種はハレムをめぐってオスが激しく競争し、身体が限界まで大きくなっていく。片や、一夫一婦制ではオスも競争の必要が無いから、テナガザルは雌雄でほとんど区別がつかない。また乱婚も争いを要さないことは同じで、雄が雌より幾分大きいだけである。我々「ヒト」は雌雄で体格の差が大きく無く、「一夫多妻制に近い一夫一婦制」とされてきた。

しかし、心理学者のライアンと精神科医のジェダは、進化の原理からは明らかにおかしいという。テナガザルがヒト科に分かれたのは2,200万年前、ゴリラは900万年前で、ヒトとチンパンジー・ボノボとは600万年前だ。ヒトの性行動は進化の上で関係の薄いテナガザルと近く、最も関係の近いボノボとは異なるとされる。両氏は次のように言う。霊長類の中で、発情期にかかわらず交尾し、性行為をコミュニケーションの道具に使うのはヒトとボノボだけだ。ボノボは進化論的にテナガザルやゴリラよりヒトに近い。よって人の本性はボノボと同じ乱婚であると。‘うふ’。

この後は『言ってはいけない』でお読みください。

